Learning for All

年次報告書 2024-2025

Message

ともに歩んだ10年、そしてこれから

2024年度、Learning for All は設立10周年という大きな節目を迎えました。この機会に、これまでの歩みを振り返るとともに、未来に向けた新たな一歩を踏み出しています。

私が学生時代、教育格差の現場で出会った子どもたちの姿こそが、団体設立の原点です。「誰にだって当たり前に与えられるべき日常を、子どもたちの手に取り戻したい」——そんな想いから、2014年にLearning for All を立ち上げました。

この10年、私たちは多くの仲間とともに歩みを進め、さまざまな地域で多くの子どもたちに支援を届けてきました。

2024年度には、兵庫県尼崎市には新たなユースセンター「Hygge（ヒュッゲ）」を、東京都世田谷区には不登校に直面する子どもたちを支援する「Ho-Ho（ホーホー）」を開設。子ども・若者が自由に利用できるHyggeは、課題が顕在化する前の「予防」にも力を入れており、「ええやん自分」と思えるような瞬間を大切にしながら、子どもや若者の笑顔があふれる場所になっています。

また、株式会社yutoriとの連携により、衣服を通じて「自分らしさ」や「選ぶ楽しさ」を子どもたちが体験できるプロジェクトを実施しました。yutoriで代表を務める片石さんは、かつて学生時代にLFAの活動にボランティアとして参加しており、今回の取り組みはそのご縁から生まれたものです。

このように、Learning for All の歩みを共にしてきた仲間が、社会のさまざまな場所で活躍し、改めて子どもたちの支援の輪を広げてくれていることをとても嬉しく思います。「自分らしくいられること」の大切さを再認識するこの取り組みは、そうしたつながりの尊さを実感させてくれるものでした。

さらに、10周年を記念して特設サイトを開設し、これまで関わってくださった皆さまとの歩みや、未来へのビジョンを広く発信しています。

私たちのすべての取り組みは、子どもたちの声に耳を傾け、そのニーズに真摯に向き合うことから始まります。子どもたちが安心して過ごせる居場所をつくり、自分らしく成長できる環境を整える——それが私たちの原点であり、これからも変わらない姿勢です。

Learning for All は、「子どもの貧困に、本質的解決を。」というミッションのもと、これからも子どもたちの未来を支える活動を続けてまいります。

そしてこの歩みは、私たちだけのものではありません。これまで支えてくださった皆さま一人ひとりが、子どもたちの未来を共に築く大切な仲間です。私たちは、ただの支援者と支援を受ける側という関係を越え、共にこの社会を変えていくパートナーとして、これからも手を取り合って歩んでいきたいと願っています。

今後とも、変わらぬご支援とご参画を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2025年 立夏
李 炯植

mission

子どもの貧困に、本質的解決を。

貧困、虐待、発達障害、いじめ、社会的マイノリティなど、
生きづらさを抱える子どもたち。
「安心」を奪われている。
「努力を信じられる環境」を奪われている。
「自分自身の可能性に気づく機会」を奪われている。
そこでは、諦めが日常化してしまっています。

2010年、学習支援からスタートした
私たちLearning for All は、
現場の経験から、この問題を解決するには
「学び」を支えるだけでは足りないと確信するに至りました。
現在では、一人の子どもが自立するまで、
地域で連携して幅広くサポートできるモデルを構築。
全国へ広げるとともに、法・制度を変え、
子どものあらゆる「貧」と「困」を
なくす社会をつくろうとしています。

value

Children First
「子ども主語」で考えつづける

Change for All
本質的解決のために変わりつづける

Inspire for All
関わる人ぜんぶに学びの機会をつくる

Collaborate for All
つながって、いっしょに創る

LFAが取り組んでいる課題

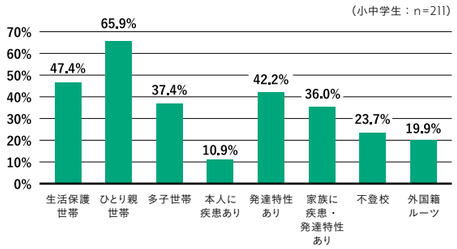
「子どもの貧困」の現状

日本の「子どもの貧困」率は、相対的貧困状態のことを表しており、
「年間の手取りの中央値の半分以下で暮らしている状態」と定義されています。
具体的には、親子２人世帯（ひとり親世帯）の場合、1ヶ月約10万円以下で暮らしている状態です。
日本の子どもは **9人に1人**（11.5%）が貧困状態にあります。
しかし、子どもたちが直面している困難は、決して「経済的な困窮」だけではありません…。

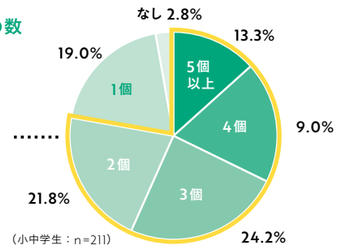
Point 1
子どもたちが直面している困難

LFAの支援に繋がる子どもたちの多くが、経済的な困窮に限らず、さまざまな不利・困難が重なった状態で生活しています。

LFAの支援に繋がった子どもの属性



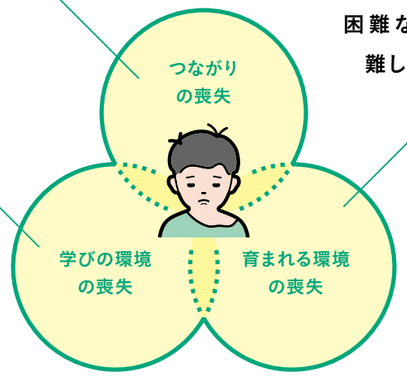
1人あたりの属性の数



約8割の子どもが1人あたり2個以上の属性（課題）を持っている。

上記のような環境の難しさが、本来子どもたちの健やかな育ちに必須である「つながり」「学びの環境」「育まれる環境」の喪失に繋がり、困難な状況から抜け出すことを難しくしています。

貧困・不登校・虐待などのさまざまな事情から、**安心できる場所がない**。
相談できる相手がおらず、支えてくれる友人や支援先とのつながりもないため、**孤立している**。



学校以外に学習環境がなく、自分に適したペースと方法で**学びを進められない**ため、学習が大きく遅れている。さらに、**自信も失い進路や将来の夢を描けなくなっている**。

不適切な環境に置かれていて、心地よい環境で適切なケアを受ける、基本的な生活習慣を身につける、めいっぱい遊ぶといった**「当たり前」の機会が得られない**。そのため心身を成長させられず、**学習以前のさまざまな課題を抱えている**。

Point 2
日本における子どもたちの実情

子どもたちがさまざまな困難に直面している結果として、子どもを取り巻く環境は、年々悪化の一途を辿っています。

小学校・中学校における
不登校児童生徒数は
過去最多の約**34万人**。

「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省）

児童虐待相談対応件数は、
近年増加傾向が続き、
直近では**年間22.5万件以上**。

「令和4年度 児童相談所における児童虐待相談対応件数（報道）」（こども家庭庁）

小中高生の**自殺者数**は、
近年増加傾向が続き、2024年は
過去最多の**527人**（暫定値）。

「【令和6年（暫定値）】小中高生の自殺者数年次推移」（文部科学省）

日本の子どもの幸福度は、
先進38か国中20位、
さらに精神的幸福度については、
38か国中37位とほぼ最下位。

ユニセフ報告書「レポートカード16」

Point 3
子どもを支える大人たちが直面している困難

「子どもたちを支える大人」もまたそれぞれの立場で課題を抱えており、「子どもたちの声」を起点とした必要な支援を、全国の子どもたちに十分に届けることが難しくなっています。

国

- こども家庭庁創設、こども基本法の策定など、各種法制度の整備・事業立案を推進中
- **新規施策・制度を全国に展開していくことに課題あり**

学校

- 業務量が多く、子ども一人ひとりと向き合うには**時間が足りない**
- 他機関との連携が必要だが、**時間も情報も足りない**
- 対応できることに限界がある

自治体

- 国が定めた新しい法律・制度があるが、それぞれ地域の実情に合わせて施策を施行することが難しい。（**事例やノウハウが不足**している）
- 子ども政策に対応する**人手が足りない**

子ども支援団体

- 寄付等での活動がメインとなり**資金が足りない**
- 子ども支援に携わる**人材が足りない**
- 地域の他機関との連携が必要だが時間も情報も足りない

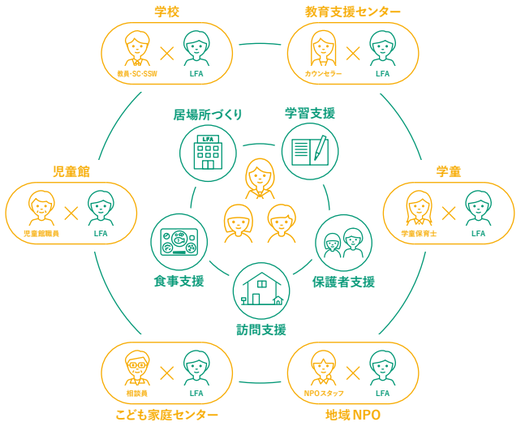
LFAの3つのアプローチ

今、目の前にいる子どもに、どこまでも寄り添うこと。
社会の仕組みそのものを、本気で変えていくこと。
そのどちらが欠けても未来はつくれない。
私たちは、志を同じくする全ての人たちと力をひとつにし、
3つのアプローチで課題の本質的解決を目指しています。

Approach 1
一人に寄り添う

地域協働型
子ども包括支援の実践

複雑で困難な環境に置かれた子どもたちの声に応じたサポートを提供するため、私たちは6~18歳の子どもたちの状況に応じた幅広い支援メニューを展開し、地域のあらゆる立場の大人たちとのネットワークを構築することで「地域協働型子ども包括支援」を進めています。



地域の大人の支援ネットワークづくり × 子どもたちへの包括的な支援提供

2024年度LFA直営提供サービス数

都・県	市・区	拠点数
東京都	葛飾区	13
	板橋区	4
	世田谷区 (NEW)	5
埼玉県	戸田市	3
茨城県	つくば市	2
兵庫県	尼崎市	2

居場所づくり

学習支援

食事支援

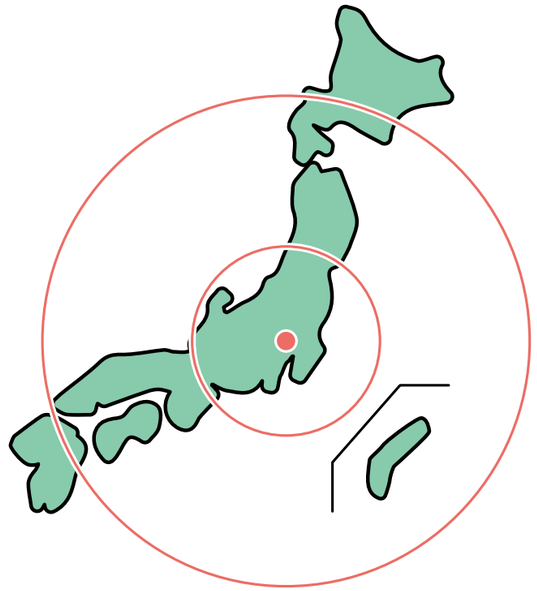
訪問支援

保護者支援

Approach 2
仕組みを広げる

地域協働型子ども包括支援の全国展開

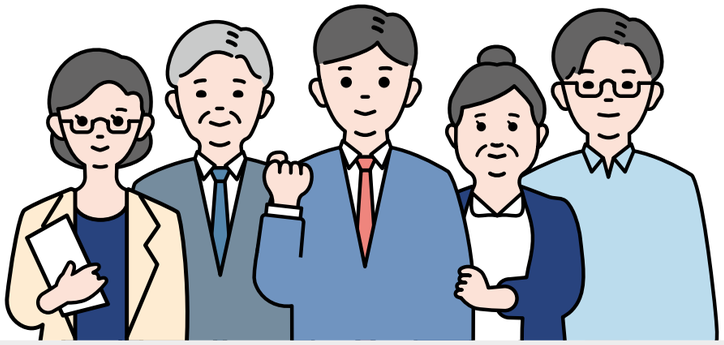
全国であらゆる立場の大人が目の前の子どもたちに向き合っていますが、その取り組みの多くは資金や人材（採用・育成）の面で持続が難しく、「量」や「質」の両方で十分な支援ができていないのが現実です。LFAでは、子ども支援団体への金銭的助成や伴走支援を提供し、子ども支援者同士が学びあうネットワークづくりを通じて、「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を推進しています。



Approach 3
社会を動かす

子どもの声を社会に届ける

子どもたちを取り巻く環境を改善するためには、私たちが子どもや全国の子ども支援団体と協働するだけでは足りません。より多くの大人が現状を知り、課題意識を持ち、行動を起こして、社会の仕組みを変えていくことが必要です。
LFAは子どもたちの声を、国や自治体はもちろん、広く社会に発信し、課題の普及啓発、人材育成、政策提言に取り組んでいます。



LFAの取り組み

2024年度の実績報告

2024年度は合計17,218人の子どもたちにLFAの活動を届けました。

※ 各拠点での年間延べ利用者数の合計になります。

＃一人に寄り添う

居場所づくり

約220名の大学生が
ボランティア・インターンで参加し
小学生〜高校生世代（6〜18歳まで）の
子どもたち221名に、安心して過ごせる居場所を
年間延べ1,972日間、提供しました。

小学生の居場所

生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして、学童保育のような形で週5日運営

中高生の居場所

不登校や家庭・学校に居場所がない子どもを対象に週3日運営

学習支援

約60名の大学生がボランティア・インターンで
参加し、小学4年生〜高校生世代
（9〜18歳まで）の子どもたち55名の学習を
年間延べ376日間、支援しました。
また37名の子どもたちが
進学・就職することができました。

2024年度 子どもたちの進学状況

高校進学 32名　大学進学 5名　就職 2名

拠点	実績（合格者数・就職者数）
葛飾	高校16名／大学3名／就職2名
板橋	高校5名／大学2名
戸田	高校4名
つくば	高校3名
尼崎	高校4名

食事支援

子ども食堂やフードパントリー、
食料品の配達などを通じて年間811回の
食事支援を行い、合計3,317食分届けました。

訪問支援

拠点に通うことが難しい子どもたちに
85回の訪問支援を実施しました。

＃社会を動かす

政策提言

子ども支援事業部の宇地原が今年も
こども家庭庁の
こどもの居場所部会委員を
務めました。

子ども支援事業部の佐藤がこども家庭庁の
「令和6年度子ども・子育て支援等
推進調査研究事業」における、
「こどもの居場所づくりに関する評価及び検証
についての調査研究」の委員を務めました。

尼崎おなかまプロジェクト

尼崎市の子ども支援に携わる
行政と民間団体が共通の研修を通じて
相互理解を深め、
協働体制を強化するプロジェクト。
年間5回の研修に約120名が参加し、
相互理解と信頼関係を深めながら、
切れ目のない子ども支援を目指しました。

つくば市職員向け研修プロジェクト

つくば市のケースワーカーや
ソーシャルワーカーを対象に、
スキルアップと連携強化を目的とした研修を実施。
支援現場から見える社会資源の
課題にも目を向けながら、
全5回の研修に61名が参加しました。

＃仕組みを広げる

こども支援ナビ

全国の子ども支援者がノウハウや想いを共有し、
支え合えるオンラインプラットフォーム。
2024年度は59記事がリリースされ、
延べ118,500名以上
（前年比+200%超）が訪れました。
また、5回開催されたオンラインイベントに
延べ278名が参加しました。

しゃちネット創設

LFAの居場所がモデルとなった
児童育成支援拠点事業をはじめとする
家庭支援事業を全国にさらに広げていくための
ネットワーク団体
「一般社団法人社会的養育地域支援ネットワーク
（愛称：しゃちネット）」の設立を支援しました。
設立フォーラムイベントには
700名以上の方にご参加いただきました。

ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金

2021年にスタートした「ゴールドマン・サックス
地域協働型子ども包括支援基金」が、
2回目の助成を決定。
2024年度には、合計4団体に
総額2,400万円の助成が行われました。

助成が行われた4団体

- 一般社団法人うみのこてらす（徳島県海部郡）
- 一般社団法人えんがお（栃木県大田原市）
- 認定NPO法人こども∞感ぱにー（宮城県石巻市）
- NPO法人ヒミツキチ（宮崎県宮崎市）

新拠点

ヒュッゲ

Hygge

“「ええやん自分」と思える瞬間を”

子どもから大人へと成長していく過程で、誰もが少なからず悩みや葛藤を抱えるものです。
「Hygge」は、悩みがあるときも、そうでないときも、誰もが気軽に立ち寄れるユースセンターです。

ユースセンターは、何をしてもしなくてもいい、若者だけの場所。
ここでは頑張りたいことを頑張れるし、休みたいときは休める。

自分のことを自分で決めて、自分らしくいれる。
今を生きる、ありのままのあなたも。
やりたいことに向かって努力するあなたも、ええやん。

頑張った自分にも、頑張れなかった自分にも、ええやん! と声をかけてあげよう。
“「ええやん自分」と思える瞬間を” あなたに。

大切にしていること

Hyggeは、子ども・若者の声を聴きながらユースセンターを企画・運営し、子ども・若者が「今しかない青春」に熱中できるよう寄り添い、ときに困りごとと共にある日々を支えます。Hyggeが地域と子ども・若者の接点となり、彼らが必要なサポートを受けられるだけでなく、自らの意見を伝えながら地域に関わっていくことを目指します。そして、子ども・若者がやがて地域を共につくる市民へと育っていくことを願い、その過程に寄り添います。

◀フリースペース
自由に過ごせる空間／「やりたい」を実現できるイベント開催

▶カフェスペース
子どもたちが飲み物を飲んだりお腹を満たしたりしながら、相談できる空間

拠点名

Hygge（ヒュッゲ）

ヒュッゲ（Hygge）とは、デンマーク語で「居心地がいい空間」や「楽しい時間」のことをさす言葉。「安らぎ」と「挑戦」の両方ができる場所にしたいという想いを込め、名付けました。Hyggeオープン前に、尼崎市内の高校生と施設の名前をみんなで考えるワークショップを開催し、決定しました。

対象

尼崎市内の子ども・若者世代

開室日時

毎週火・木・日　14:00－21:00

開所日数

96日（24年8月オープン）

延べ利用者数

1,495人

子どもたちのおはなし

Kちゃん
（19歳）

Q：普段はどんな過ごし方をしていますか？

2年間続けているバイトがあって、そこでの出来事を話しています。最近は任せられる仕事も増えてきて、とても楽しいし、勉強にもなるのですが、Hyggeで話す時は、“浄化”に近い感覚で喋っています（笑）。料理も好きで、ハロウィンにはかぼちゃプリン、バレンタインにはチョコを作りました。高校生以上はキッチンを使えるのでけっこう使ってます。この前はパスタを食べたくて材料を買ったのですが、逆に1人前って難しくて。2〜3人前を作り、お腹空いてる人に「食べる？」って聞いて、食べてもらいました。
Hyggeは、心が子どもみたいな大人が多くて、一緒にいて楽しいです。でも、ダメなことはちゃんと「ダメ」って言ってくれる。ピアスを開けていいか相談したときも、ちゃんと止めてくれました（笑）。学校っぽくはないけど、ちゃんと見てくれている安心感があります。いつも大きな声が響いていて、うるさいけど平和、みたいな雰囲気です。

スタッフのおはなし

子ども支援事業部
Hygge 副センター長
池田流輝

Q：拠点を運営していく上で、大切にしていることはありますか？

一番は、「楽しい瞬間を過ごせること」です。子どもたちが何かを相談してくれたときは、「話してくれてよかった」と安心もしますし、本人がそれをどう受け止め、どこまで向き合おうとしているのかを一緒に考えていきます。一方で、相談してこないこともあります。そんな時は無理に聞き出そうとせずに、Hyggeにいる間はとにかく楽しい瞬間を過ごしてほしいと思っています。子どもたちにとって困りごとを解決できることが理想かもしれないのですが、「困りごとを解決しないままでも楽しい瞬間を過ごせる場所がある」というのは、とても必要で大切だと感じています。

地域とのつながり

商店街の会議に参加し、オープンサンド会を開催

Hyggeの大きな特徴の一つは、「商店街の中にあること」。商店街の方からお声がけいただき、子ども・若者たちとの地域との関わりや体験の機会をもっと広げられないかと考え、2024年11月から商店街の会議にLFAも参加。その取り組みの一環として、子どもたちの「食」のニーズに応えるかたちで「オープンサンド会」を開催しました。オープンサンドは、パンに好きな具材を自由にのせて、自分だけのサンドをつくるバイキング形式。トンカツサンド用のきゅうりやトマトを一緒に調理してくれた子どももいました。子どもたちは商店街の方からいただいた具材をたっぷり乗せてオープンサンドを満喫。天ぷら屋さん特製のトンカツや、パン屋さん自家製のカスタードクリームは大人気で、中には3つ食べた子もいました。賑やかで楽しいひとときとなりました。

新拠点

ホーホー

Ho-Ho

どれも自分自身で、そしてともに。

「Ho-Ho」は、学校に行かない・行けない、
またはそんな経験のある中高生世代が、安心して過ごせる居場所です。

ここでは、「今日は何したい?」という小さな問いから、将来の夢まで、
自分の気持ちに気づくことが始まります。「わからない」から始めても大丈夫。
「こっちがいい」「これが好き」を自由に話していい。

その一歩を、みんなで応援します。
ひとりで頑張らなくていい。いつも、誰かがそばにいます。

この居場所は、ひとりで歩くのではなく、仲間やスタッフと「ともに」歩いていける場所。
見守ってくれる人がいて、安心できる関係の中で、少しずつ自分を見つけていけるように。

大切にしていること

子どもたちが自分のペースで過ごせる居場所であることを大事にしています。温かく安心感のある空間で、自分らしくみんなと過ごしていくこと、そして、その時間を積み重ねていくことで、一人ひとりが自分を知り、相手を知ることを大切にしています。

▶リビング：子どもたちが過ごすメインの場所。落ち着いた雰囲気で、まるで家に帰ったような安心感がある。

◀Ho-Hoに通っている Nくんが書いたロゴとイラスト。昔から絵を描くのが得意だったNくんは、デザイナーである父親から絵を描くコツや視点を学びました。「ホーホー」と鳴くフクロウは、母親から「アオハズク」だと教わり、その特徴を取り入れて描いたそうです。

拠点名

Ho-Ho（ホーホー）

「どんな気持ちのときでも来れる居場所であるように」という想いを込めて、あえて名前に意味を持たせない名前にしようと、Ho-Hoがある地域名から着想を得て名付けました。元気な時も元気じゃなくても、ここはそのままで大丈夫という願いが込められています。

対象

世田谷区在住、在学の
中学1年生～高校生世代
（12～20 歳程度まで）

開室日時

毎週火 13:30－17:00
水・木 11:00－17:00

開所日数

54日（24年8月オープン）

延べ利用者数

288人

子どもたちのおはなし

Eちゃん（高校3年生）

Q：Ho-Hoで過ごして一番楽しかった思い出は何ですか？

クリスマスパーティーでピザを食べたんですけど、本当においしくて。音楽も流れていて、すごく楽しかったです。それと、お願いしていたツリーももらえて、リボンも星もキラキラしていて、すごく可愛かった。Ho-Hoは本当に居心地が良くて、スタッフさんも優しいし、まるで家にいるみたい。お布団もあるし、のんびりとリラックスできます。素を出せるというか、自分を出せる空間で、気を張らずに過ごせます。

子どもたちのおはなし

Hくん（高校3年生）

Q：将来の夢は何ですか？

「保育士」になることです。高校1年生の頃から保育園でボランティアをしていて、子どもたちと過ごす時間が本当に楽しいんです。最近その子たちが卒園して、もう寂しくてロスになりました（笑）。Ho-Hoではプレゼントでもらった楽譜で、ピアノの練習をしています。「じゃんけん列車」は、保育園の子どもたちと一緒にやったんですが、子どもたちの顔を見ながら弾くので、鍵盤を見なくても弾けるようになりました！

スタッフのおはなし

子ども支援事業部 拠点長
吉原聡子

Q：これまで拠点で過ごす中で、楽しかったことはありますか？

ぱっと思い浮かぶのは、「日常」です。特別なイベントがなくても、毎日、子どもたちの何気ない一言やそれぞれの会話で何かしら笑いが生まれているんです。もちろん楽しかったイベントもあって、井の頭公園への遠足では、夢中で動物の写真を撮ったり、動物をじっくり観察したり、ボートに乗ってはしゃいだり…。私たち大人が何かを仕掛けなくても、子どもたちが自分のやりたいことを自由に楽しんでいるからこそ、面白いことが日々次々と生まれます。どの日を振り返っても、楽しい思い出ばかりで選びきれません。

地域とのつながり

「世田谷ブライトネットワーク」を設立。

不登校の理由は、100 人いたら100 通り。お子さんから「学校に行きたくない」と言われたとき、どう対応すればよいか分からず、相談先や居場所にたどり着くことも難しい。そんな状況の中で、多くのご家庭が孤立し、不安を抱えながら日々を過ごすことも少なくありません。そこで、不登校のお子さんやご家族が、必要な情報や仲間につながりやすくなるように、「世田谷ブライトネットワーク」を設立しました。このネットワークは、行政をはじめ、地域の支援者や居場所の運営者、親の会、当事者の子どもたちを集めた運営会議を実施し、連携を深めています。

HPはこちら

子どもたちの年間イベント

今年も子どもたちとさまざまなイベントを行いました。

4月 旗づくり

中高生向けの居場所拠点では、毎年恒例の旗作りを行いました。絵の具や布用ペン、フェルトを使って自由に作成。年間通して壁に掲示されています。

7月 七夕

子どもたちは思い思いに、自分だけのオリジナル短冊をつくりました。絵や言葉、シールなどを使って願いごとを自由に表現し、笹へ飾りつけました。

8月 花火大会

近くの公園で、手持ち花火やビンゴ大会を開催!子どもたち自身が企画・運営し、きゅうりやいちご飴、チョコバナナの屋台も手作りで準備。大いに盛り上がりました。

10月 食欲の秋、旬に触れる

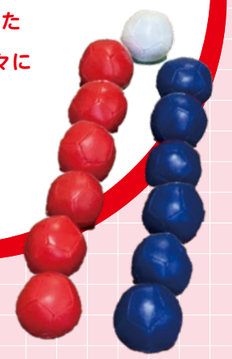
地域の八百屋さんで、お買い物に挑戦。旬の野菜やくだものに触れながら、クイズ大会も開催しました。翌日、おさつチップスづくりも楽しみました。

10月 ハロウィン

カボチャプリンやカレーをみんなでつくって楽しむハロウィンパーティーを開催!地域のパン屋さんから約20個のパンをご寄付いただいたり、講師を招いて仮装メイクをしたり。にぎやかな1日となりました。

11月 ボッチャ大会

ヨーロッパ発祥のパラスポーツ「ボッチャ」を楽しむスポーツ大会を開催!子どもたちは白熱した戦いを繰り広げ、狙いすましたスーパーショットが次々に決まり、大きな歓声も上がりました。



1月 「今年やりたい、100のこと」発表

新しい年を迎えた子どもたちは、「2025年にやりたい100のこと」を考え、発表しました。「アップルパイを生地から作りたい」や「ギターを上達させる」などを目標に掲げ、子どもたちは和気あいあいとしていました。

3月 卒業式

卒業前に「一目会いたい」と駆けつけたスタッフもおり、涙を流して喜ぶ子も。寄せ書きを渡したり、やんちゃだった頃の思い出話に花を咲かせたりと、拠点での日々を温かく振り返りました。

「ここでは泣いてもいい」寺子屋は、思春期の私たちの居場所だった。

寺子屋卒業生の二人が自ら声を上げて企画したのは、
学生ボランティアとして関わっていた「元先生」たちを招いた同窓会。
2018年からスタートさせた「地域協働型子ども包括支援」の
意義を振り返る機会にもなりました。

SさんとTさん
中学生時代に、LFAが学校内で実施していた学習支援教室「やる気塾」に参加。その後、学習支援拠点「寺子屋」にも通うように。現在は、それぞれ大学生・社会人として新たな道を歩んでいる。

宇地原栄斗
学生ボランティアとしてLFAに関わったのちに入職。現在は「子ども支援事業部 葛飾・つくば エリア統括責任者」として現場を支えている。当時は、Sさん・Tさんの学習指導を担当。

本記事はnoteの抜粋となります。
記事全編はこちらからお読みください。

寺子屋での「思い出」

Sさん 一番印象に残っているのは、中学3年生で出場した陸上大会。良い結果が出せなくて、家族の前では絶対に泣かないし、知らない人の前でも泣いたりしないんですけど、寺子屋では大号泣してしまって。教室で全然止まらなくなって。

宇地原 二人が寺子屋を卒業する日のこともよく覚えている。卒業式で、みんなを見送ったと思ったら、二人が戻ってきてくれて。その時にTが「自分は話すのがずっと苦手で、今こうやってみんなの前で話していることがびっくりなんですけど……」と言いながら、自分の思いを話してくれたんだよね。とても嬉しくて感動したの覚えてる。「寺子屋での日々は楽しかった」って言葉に、自分も他の先生も大泣きして。「人生で一番泣いた」くらい。

Tさん そうそう、先生の涙が印象的でした。あの時はあまりにも感極まってしまって、自分が何を話したかも覚えていないくらいです。

同窓会で伝えたかったこと

Sさん 僕は（同窓会の近況報告で）気づいたら30分くらい話し続けていたんです。「あの時があったから今こうなれました」って。来られなかった先生方にも手紙を書き、その時の気持ちを伝えました。普通の卒業式なら「お世話になりました」で終わってしまうところですが、僕は先生たちに「この活動をしていて良かった」と思ってほしかった。

Tさん 私も、本当に辛かった時に連絡して助けてもらったときのことを思い出して、感謝の気持ちを伝えないと後悔すると思ったんです。言わなかったら未練になる、それくらいの思いでした。

同窓会を経て、今後やってみたいこと

Tさん 寺子屋のように毎週じゃなくても、何かあった時に「1年前はこんなこと言ってたよね」って振り返れる場所があれば。全員が集まれなくても、半年に1回とか1年に1回でも。お互いのことを知っている人たちだけで、定期的に集まって、少しでも近況を話せば、救われる気持ちもあるかもしれないから。

宇地原 大人にも「居場所」は必要だもんね。つながりが切れちゃうことも多いし。こんなふうに、かつての教え子が新しいアイデアをくれたり、実際に運営側に回ったりしてるのも、LFAが10年続けてこれた証だし、続けて良かったと思えるよ。

仕組みを広げる

一般社団法人 社会的養育地域支援ネットワーク（しゃちネット）創設

2024年は改正児童福祉法が施行され、LFAの居場所がモデルとなった児童育成支援拠点事業をはじめとする家庭支援事業を全国展開するきっかけの年となりました。
LFAではこの動きを更に加速させ、家庭支援事業を全国に広げていくために、全国ネットワーク組織である「一般社団法人社会的養育地域支援ネットワーク（愛称：しゃちネット）」の設立支援を行いました。
本法人では、全国研究交流大会の運営や支援実務者に対する研修、調査研究活動などを通じて、家庭支援事業の全国への普及を目指していきます。

2024年度の活動実績

24年7月に法人立ち上げを行った後、会員獲得にむけてフォーラム・イベントの運営を行いました。2025年度以降も、研修・勉強会の実施や政策提言活動等、ビジョン達成に向けた活動を予定しています。

2024年9月

設立記念フォーラム開催

参加申込者数　736名（現地156名／オンライン580名）

内 容　理事によるクロストークや来賓挨拶を含む全体会に加え、改正児童福祉法にて新設・拡充された事業（例：児童育成支援拠点事業）を中心とした全6分科会を実施。実務上の課題や今後の展望について、活発な議論が交わされました。

2025年1月

『ターラの夢見た家族生活』著者 来日記念イベント開催

参加申込者数　219名（現地47名／オンライン172名）

内 容　フランスで話題となったコミック『ターラの夢見た家族生活（LA VIE REVÉE DE TARA KABÉ）』の著者パボ氏と、フランスにおける子ども家庭福祉研究の第一人者・安發明子（あわ・あきこ）氏を招き、子どもを地域で支えるヒントを探る特別イベントを開催しました。児童保護や在宅支援の現場で20年以上にわたり活動してきたパボ氏の実践をもとに、支援のあり方を深く考える時間となりました。

社会を動かす

政策提言

LFAは自団体の活動や、全国の子ども支援団体との協働を通じて得た知見を基に、課題の普及啓発・政策提言活動を積極的に行っています。

昨年に続き、LFAエリアマネージャーが“こども家庭庁 こども家庭審議会 こどもの居場所 部会委員”を務めました。

2023年4月1日に内閣府のもとに新設された「こども家庭庁」では、子どもたちの居場所づくりに関する調査・研究を行う「こどもの居場所部会」が設置されました。 子ども支援事業部のエリアマネージャー・宇地原栄斗は、昨年より同部会の委員として継続的に参画しています。

2023年12月に「こどもの居場所づくりに関する指針」が閣議決定され、子どもたちにとっての安心・安全な空間づくりの方向性が全国に示されました。宇地原は引き続き、支援現場で培った知見と子どもたちの声を政策に反映させるべく、議論と提言に取り組んでいます。

LFA設立当初から大切にしてきた「常に子どもたちを中心に考え、彼らにとって安心安全な空間を創る」という思いを胸に、これからも制度と現場をつなぐ存在として努めてまいります。

子ども支援事業部
エリアマネージャー
宇地原栄斗

子ども支援事業部
エリアマネージャー
佐藤麻理子

LFAエリアマネージャーが”こども家庭庁 調査研究事業 有識者検討委員会”に参画しました。

子ども支援事業部 エリアマネージャーの佐藤麻理子が、こども家庭庁の調査研究事業として実施されている『こどもの居場所づくりに関する評価及び検証についての調査研究』に、有識者として委員会へ参画しています。

本調査は、子ども・若者の居場所づくりを担う民間団体や自治体が、事業の評価・検証を通じて、効果的なPDCAサイクルの構築・運用を行えるよう支援することを目的としています。

委員会では、1.固有の居場所と2.地域全体の取り組みの2つの視点において、評価・点検のための指標の検討が進められています。

【1.固有の居場所】
各居場所の運営者が、自らの活動に必要な要素を備えているかを自己点検できるような評価指標を作成。

【2.地域全体の取り組み】
指針を踏まえ、地域全体としてどのような姿を目指し、どのような観点で検証を行うべきかを明らかにする指標を作成。

子どもたちが自分らしく過ごせる安全な空間を全国各地に広げていくために、現場での学びを制度に反映させ、実効性の高い評価・検証の仕組みづくりに貢献してまいります。

企業連携 事例紹介 ～日本オラクル株式会社さま～

日本オラクル株式会社、第10回「企業ボランティア・アワード」で大賞を受賞

2024年度、日本オラクル株式会社がLFAと連携して小学生向けに実施しているワークショップが、第10回「企業ボランティア・アワード」にて大賞を受賞しました。

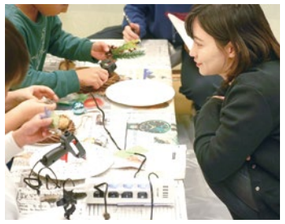
この活動は「体験格差の是正」「自由で新しい発想」をテーマに、社員ボランティアの皆さまがLFAの居場所拠点でクラフト体験などの企画・運営を行ってきたものです。2021年の開始以来、これまでに16回開催され、延べ144名の社員ボランティアの皆さまに参加いただいています。

活動のきっかけは、コロナ禍で子どもたちの体験機会が大きく減少したことをLFAが相談したことでした。それを受け、当時オンラインでの海中継やサーフィンの疑似体験イベントを実施。以降も年3～4回のペースで、季節に合わせたイベントを継続的に企画・実施してくださっています。

世界のクリスマスを学び、個性あふれるリース作りに挑戦！

12月には、LFAの居場所拠点にて、クリスマスワークショップを開催しました。前半は、クリスマスの起源や世界各地の祝い方について、ミニクイズを通じて楽しく学ぶ時間に。「この場所はアメリカの下だ！」「これってどの大陸だっけ？」と、お互いに協力し合いながらクイズに取り組み、学びを深めていきました。

後半のリース作りでは、子どもたちがお互いに道具の使い方を教え合い、作品を褒め合いながら、それぞれのアイデアを形にしていきました。「自然観を意識したリースにした！」という子や、カラフルで華やかなパーツを使って、目を引くデザインに仕上げた子も。こだわりの詰まった作品が完成しました。オラクルボランティアの皆さまは、デザインや素材選びにていねいなアドバイスを行い、完成度の高い作品づくりを後押し。子どもたちは自分の出来上がったリースに満足げな表情を見せ、保護者に誇らしげに披露する姿も印象的でした。



Learning for All は、
2024年7月、設立10周年を迎えました。

これまでともに歩んだ人、支えてくれた人、
学んでくれた人へ心から感謝を込めて。

「子どもたちにとってのあるべき社会」の実現を目指して、
みなさまとより良い未来をともに考え、
つくっていけることを願っています。

特設サイトはこちら

LFA's History

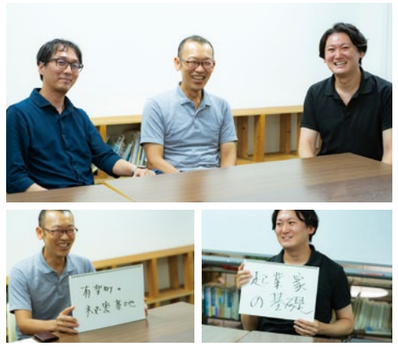
LFA設立10周年を記念し、
これまでの歩みを知る人々を招き、
10年間を年度ごとに語り合う連載企画
「LFA's History」をスタート。
全国の子ども支援団体から寄付企業、
プロボノ、自治体、寄付者の方々など
さまざまな立場の方から
当時を振り返るキーワードとともに
語っていただきました。

2014

学習支援NPOとして、法人を設立

2015

新法人としての
学習支援事業を開始



2016

埼玉県戸田市で
居場所づくり事業を開始

2017

活動を加速させるため、
コミュニティづくり・
ファンドレイジングを本格始動

2018

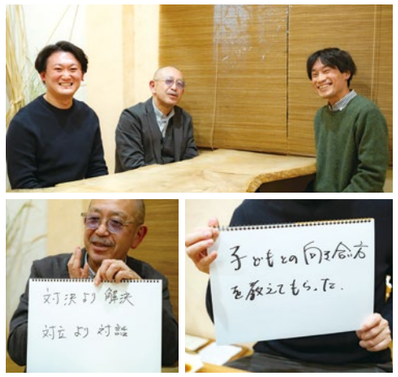
「単一サービスの提供」から
「地域協働型子ども包括支援」へ

2019

ステークホルダーの拡大、
これまで以上に多くの仲間と
協働する団体へ

2020

コロナ禍の生活困窮世帯の
子どもたちに向けた、
緊急支援を展開



認定NPOとなり、
これまで以上に多くの
ご支援をいただける団体に。

2021

2022

2023

子ども支援の実践経験を
他団体の支援に活かす、
「仕組みを広げる」活動を本格化

実践の積み重ねや
「社会を動かす」活動をもとに
児童育成支援拠点事業が事業化

10年前から大切にしてきたもの

LFAが大切にしてきた想いと、ともに歩んできた方々のまなざし

この10年間、Learning for All は、
「子どもの貧困に、本質的解決を。」をミッションに掲げ、活動を続けてきました。
私たちが大切にしてきた価値観や歩みは、寄付者の皆さま、地域の子ども支援団体、
プロボノをはじめとする多くの方々の目に、どのように映っていたのでしょうか。
「LFA's History」で寄せられた声とともにこれまでの10年を振り返り、
これからのLFAへの応援や期待の声を集めました。

大切にしてきたもの①

子どもの声

LFAは、活動を進めるうえで常に子どもたちの声を大切にしてきました。正解のない状況の中で、子どもたちと向き合い、試行錯誤を重ねながら少しずつ仕組みを築いてきましたが、立ち戻るのはいつも、「答えは子どもたち自身が持っている」という考え方。子どもたち一人ひとりが持つ力や可能性を尊重し、それを起点として、支援のあり方を常に問い直しながら取り組んできました。

やっぱり、LFAはどこまでも子どもファーストだから。いつでも「目の前のひとりの子どものために」正しいことをやり続けたい。合理的じゃなくても、効率が悪くても、そういう意思決定をしないと意味がないですね。その感覚は、常に自分も大事にしなくてはと思います。

李炯植 LFA代表理事

子どもは常に正解を見せてくれていて、あとは大人である自分たちがそれをいかに掴めるかでしかないよね。どんな子どもが来るかはいつもわからないし、必ずいろんなトラブルや傷を背負っている。 子どもをそれぞれ、全員ちゃんと救えなかったら、李さんの後を付いてきてくれる人にも背中を見せられないものね。

平沢安正さん

そうですよね。常に、大切なことはみんな子どもが教えてくれます。子どもから教わったことを次の子どもたちへ返していく。それがLFAにとって大切な役割なのだと思っています。

細田詠平 世田谷拠点責任者

キーワードといえば拠点目標の「Path Change」です。

元学生ボランティア
家坂光弥さん

大切にしてきたもの②

ビジョンの共有

学習支援を行ううえで、私たちが共有してきたビジョンが、“Path Change”。
それは、子どもの人生を外から恣意的に変えるのではなく、子ども自身の力で人生の選択肢を広げていけるよう、その“道筋”を支えるという考え方に基づいています。LFAでは立ち上げの当初から「どんな未来を実現したいのか」を込めたビジョンを言葉として共有し、その実現のために1分1秒に意図を持ち、こだわりを持って子どもたちに向き合うことを大切にしてきました。ビジョンを共有することで、一人ひとりが熱量を持って活動に向き合うことを可能にしてきました。

共通のビジョンがあったからこそ、私たちは一人ひとりが本気で取り組むことができました。そこに注がれたのは、“熱量”と「1分1秒に意図を持つ」という意識。その姿勢は、今もLFAの現場に受け継がれています。

LFA代表理事
李炯植

やっぱり「応援され続ける人」って居るんだな、と思います。それは本人の可愛げだったり、「しょうがないな」と思わせるものがあるのかもしれない。でも、本気でやっているというのは、人の心を打つんですよ。

プロボノチーム
小林大輔さん

子どもたちが安心安全で、笑顔のある空間にしつつも、絶対に「今の結果」と「未来の結果」を届ける。それが結局は子どもの「未来の笑顔」につながり、人生を変える。これこそが僕たちのやるべきことである。そういうビジョンを「Path Change」に集約したんだ。

素晴らしいと思っているのは、問題にぶつかった時に活動が広がっていっていることです。最初は学習支援だと思っていたけど、「それだけじゃすまない」と気づいて広げていく。中学生だけでなく、もっと低学年から支援が必要だと気づいて広げていく。本質的な解決のために活動領域を広げていくというのは、まさに皆さんが目指しているものだと思います。

個人サポーター
中川司さん

2017年頃にはオフィスを研修会場として貸し出していて、毎回100人を超える学生たちが、子どもたちによりよい教育を提供できるよう、お互いの事例から学びあっていました。学生たちがものすごい熱量で活発に意見を交換していて、それを間近に見た社員からは「学生たちが一日、集中を切らせず真剣に学ぼうとする姿を見て、自分も活力をもらった」というような感想を聞くことが多かったです。

日本オラクル株式会社
川向緑さん

大切にしてきたもの③

学びあう

LFA初期、何をすればよいのか手探りの状態で、人手も十分ではありませんでした。そうした中で、私たちは仕組みを工夫し、乗り越えようとしてきました。鍵となったのは、「学びあう」という姿勢。子どもから学ぶことはもちろん、ボランティア・スタッフ同士、また、関わる大人すべてとともに互いに学びあいながら活動を続けてきたことが、今のLFAの土台になっています。

ボランティアの学生さんたちが、教えることは「自分たちの勉強にもなる」と考えている。LFAでは「この子にはこういう言い方をすれば理解できたかもしれない」といった反省をする。その姿勢が素晴らしいと思います。

NPO法人ハーフタイム・元理事長
石原啓子さん

子どもって、僕らが思ってる以上にいろんなことを考え、いろんな顔を持って、親に対して、友達に対して、大人に対して接している。そこをもっともっと知りたいですし、学びたい。今は環境や立場が変わって、まず率直に思うことですね。

世田谷拠点責任者
細田詠平

LFAへの応援の声・期待

Learning for All がこの10年歩んでこられたのは、
子どもたちの未来に本気で向き合う多くの方々と、
手を取り合ってこられたからこそ。そんな皆さまから寄せられた、
Learning for All への期待と応援の声をお届けします。

個人サポーター
順毛楓さん

社会人サークルのような形で寄付者同士や職員の方、子どもたちとの交流があると面白そうです。そういった活動があると寄付のモチベーションも上がりますし、知人との雑談のネタになったり、周りを誘ってみようという気持ちも強くなると思います。

プロボノチーム
小林大輔さん

李さんが次に目指すべきは、グローバルなプレゼンスだと思うんです。日本で取り組んでいる課題は、タイやインドネシアといった国々が今後直面する社会課題とも共通してくるはず。そういった国々と連携することで、教育の課題はもっと解決に進むかもしれません。

NPO法人ビーンズふくしま
山下仁子さん

東京と福島では、同じ国の動向があっても、地域の特性によって子どもたちに必要なことや支援のあり方が違います。震災を経験した福島の子どもたちと、東京の子どもたちでは求められる支援も異なります。そういった情報を共有しながら、東京と福島の子どもたち、そして現在と未来について一緒に発信していけるといいですね。

NPO法人レインボーリボン
緒方美穂子さん

LFAには、葛飾区全体の子ども支援で、リーダーのような役割を期待していますね。日々、子どもに関することはアップデートがとても早いじゃないですか。国際的な動きもある。そういうところで、地域を作っていく「知的な」リーダーシップを取ってほしいんです。

NPO法人ハーフタイム・元理事長
石原啓子さん

そうですね。具体的な政策提言も含めて、知識が多く、法律にも明るい存在として、そういった役割を果たしてくれるのであれば、ぜひお願いしたい気持ちがあります。

寺子屋卒業生
Tさん

これまでLFAと関わってきた高校生や大学生、それから社会人になっても、気軽に来られる場所があってもいいんじゃないかなって。「会社でこんなことがあったんだよ」みたいな話ができる場所。なんか、すごい頑張って「ちゃんと大人になりました」みたいに見せなくても良くて。今、何をしているのかを共有できる機会があればいいなって。

皆さまから寄せられた声は、私たちの現在地を映し出すと同時に、
これからの挑戦へと背中を押してくれるものでした。地域や立場を越えて、
子どもたち一人ひとりに寄り添いながら、「共創」し続けていくために。
Learning for All は、すべての子どもたちの可能性が拓かれる社会をめざして、
次の10年への一歩を踏み出します。

Collaboration

株式会社yutori

「子どもたちに“Path Change”を届け、人生を変えるきっかけに」

コラボのきっかけは、yutori 代表・片石貴展さんが2013年冬に学生ボランティアとして関わっていたことから。今回のコラボの様子と片石さんへのインタビューをお届けします。

右、yutori代表・片石貴展さん

コラボ 1　LFAの居場所に通う子どもたちに、たくさんの服をプレゼント。

配布当日、拠点には yutori から寄付された服がずらっと並び、子どもたちは楽しそうに服を選びました。「これ似合うかな?」と話しながら、いろんなデザインや素材、形の服を手に取る姿がとても印象的。感謝の気持ちを伝えたいと、子どもたちから yutoriさんへ寄せ書きも送られました。

コラボ 2　yutoriとのコラボグッズが発売!

コラボグッズには、「Path Change」という言葉が使われています。これは、片石さんが学生ボランティア時代にLFAで大切にしていた考え方。この言葉には、“子どもたちの人生を変えるきっかけになりたい”という想いが込められています。当時の片石さんは、「自分の行動が子どもたちの未来に影響を与える」という強い責任感を抱きつつも「子どもたちの未来は彼・彼女ら自身で創れる」というワクワク感も感じていました。その過程を見守り、成長していく姿やその変化を見届けられることは、何よりの喜びだったそうです。

今回のコラボについて片石さんよりメッセージ!

── LFAの活動の中で、特に心に残っているエピソードはありますか?

今も心に残っているのは、「LFAの教師陣の情熱に触れた瞬間」。教師陣といっても、みんな学生ボランティアなので、年代も背景も自分と似たような人たちばかり。それでも、彼らの熱量は本当に圧倒的で刺激になりました。そしてその熱量が子どもたちに伝わり、子どもたちが少しずつ変わっていく過程を目の当たりにし、すごく熱い気持ちになりました。

── 今回の取り組みについてどう思われますか?

大学時代のボランティア経験を通じて、経済的困難や家庭環境に問題を抱える子どもたちへの支援の重要性を肌で感じ、教育や居場所づくりにおける意義を深く理解しました。yutoriとLFA はアプローチこそ異なりますが「服や居場所を通じて子ども・若者の人生を強いものに変える」という思想は深く共鳴しています。ファッションが持つ力を信じ、それを通じて子どもたちの未来を支える手助けができることを、心から嬉しく思います。

株式会社インターブランドジャパン／NEWTOWN

「プロボノならではのフラットな関係から見えた、社会課題×デザインのヒント」

2024年7月に公開された「10周年記念特設サイト」は、多くの反響をいただきました。本頁では、プロボノ*としてサイトの制作に協力いただいたインターブランドの東洋介さんと山崎大作さん、NEWTOWNの犬飼崇さんへのインタビューをお届けします。

左から、NEWTOWNの犬飼さん、IBの東さんと山崎さん

*プロボノ：仕事で得たスキルや経験を社会貢献に活かす活動

▼インターブランドさんからのデザインの初期案。3D型のバルーンやランダムな階段など最終形にも通じるものも。

── コラボの経緯を教えてください。

東　インターブランド（以下、IB）は「Better for Good」というプロジェクトを通じて、社会課題に挑む NPO や中小企業など、ブランド価値を十分に引き出せていない組織を支援しています。その活動の一環で、「子ども」分野の団体を調べる中、LFA に注目し、メールで問い合わせたのがきっかけでした。私自身が親になったこともあり、未来を担う子どもたちは重要な存在であると考え、LFAさんが目に留まりました。

── 通常のクライアントワークとどのような違いがありますか?

犬飼　私の場合、「仕事ではない」と思って取り組みました。これはお金をいただくクライアントワークではなく、ボランティアとして参加しているという意識が強かったです。だからこそ、フラットな姿勢で臨めることがやっぱり醍醐味でした。そのフラットな関係の中で「ここは違う」と意見を言うことも必要だと考え、今回はスケジュールや進め方も 遠慮せずに提案しましたね。

東　クライアントワークでは、時間や予算などの制約がありますが、社会課題に向き合っていく「プロボノ」では、「妥協せず理想を追求すべき」という考えが根底にあります。どこまで自分の労力を割いて理想を追い求めるかは、関わる人の意思に依る部分が大きい。「全員がハッピーで関わり続けられるには」を念頭に、私が意思決定を担いながら、いい意味で妥協しない覚悟を持って進められたのが良かったですね。

── 今後、取り組んでみたいことはありますか?

山崎　以前ミーティングで話に上がった「寄付していることを言いづらい」という日本文化の話題がとても印象に残っています。
海外では、寄付やボランティアが文化として根付いていますが、日本でも市民権を得る形でこれらを浸透させることができれば、社会全体に大きな影響を与えられると思います。寄付やボランティアがもっと身近で日常的なものになるような仕組みづくりに挑戦してみたいですね。

10周年記念グッズ・全ラインナップはこちらから →

Roundtable Discussion

「LFAってどんな場所？」

～現役学生インターン・卒業生・職員の3者で紡ぐLFAの現在地～

現場を支える「現役の学生インターン」
「卒業生（アラムナイ）」「職員」という立場の異なる3人に、
LFAらしさや活動の中で感じた変化、
心に残るエピソードなどを伺いました。
普段なかなかお伝えしきれない、子どもたちと日々向き合う
メンバーそれぞれの想いや気づきをお届けします。

［左］
馬谷 萌（とらたに・めぐみ）
2017年、教員を志望していた大学3年生のときに学習支援ボランティアとしてLFAに参加。活動を通して子どもたちがそれぞれらしく成長していく姿に魅せられ、子どもたちの暮らしをより豊かにする社会作りに携わりたいと考えるようになる。長期インターンを経て、2020年4月にLFAに入職。現在は戸田の居場所拠点の責任者として、日々子どもたち一人ひとりと真摯に向き合っている。ニックネーム「おめぐ」。
オフの日は… 野球観戦でリフレッシュ。地元・福岡への帰省時には、福岡ソフトバンクホークスの応援に熱が入る。

［中央］
高井 花菜（たかい・かな）さん
2018年、大学1年時にLFAの居場所づくり拠点初のボランティア1期生として活動を開始。のべ5年間LFAに関わる。高校時代に教育課題の背景にある社会的要因に関心を持ち、福祉の視点から子どもと向き合うことを志すように。現在はスクールソーシャルワーカーとして公的な立場から地域の子どもたちを支えつつ、任意団体『はっこう基地』を2024年10月に設立し、民間の立場からも中高生年代の居場所づくりに取り組んでいる。ニックネーム「かなちん」。
オフの日は… はっこう基地の拠点である古民家を舞台に、DIYイベントや住み開きだからこそできる空間づくりやイベントを企画中。

［右］
新西 蒼太（しんにし・そうた）さん
2023年に学生ボランティアとしてLFAに参加。自身が恵まれた環境で育ったことをきっかけに、同じような機会がすべての子どもに開かれているわけではないと気づき、社会への関心が芽生える。インターン経験を通じて、学習支援や居場所づくりに深く関わるように。今後は、世田谷に新たに開設予定の学習支援拠点「まなラボ」でインターンを予定している。ニックネーム「そた」。
オフの日は… 愛犬ブラニ（ミニチュアシュナウザー・4歳）との時間が癒し。最近、モデル犬デビューも果たした。

── 本日は、LFA職員、アラムナイ（元・LFAの学生ボランティア・インターン生）、そして現役・学生インターンというそれぞれの立場から三人にお話しを伺っていきます。まずは、LFAってどんな場所だと思いますか？

高井（かなちん） LFAは“自分を成長させてくれる場所”だと思います。学生時代におめぐと一緒に活動していて強く感じたのは、「学生に任せてくれるのが当たり前」というカルチャーが強く根付いていることです。任せてもらえることで、「応えたい」という気持ちが芽生え、自然と主体的に動くようになりました。
活動中には、定期的にリフレクション（内省）の時間があって、自分の取り組みを振り返ったり、仲間と価値観を共有したりする中で、少しずつ「自分ってこういう人なんだ」と言語化できるようになりました。LFAのメンバーは「相手のいいところを見つけるのが得意な人」が多いんです。

新西（そた） 僕はこれまで4つの拠点で活動してきたのですが、どの拠点にも共通するのは、「安心できる空間」であることです。LFAはボランティアであっても、しっかりと研修を受けてから現場に入るので、一人ひとりがお互いを尊重する基盤があり、それがみんなが自分らしく関われるという個性の豊かさにつながっていると思います。

高井（かなちん） わかります！職員の方がまず楽しそうにしていて、安心できる空気をつくってくれているから、学生同士も自然とその雰囲気を引き継いでいける。子どもの居場所づくりに関わっていたはずが、いつの間にかLFAが私自身の“居場所”にもなっていたことに、ある日ふと気づいたんです。

馬谷（おめぐ） 実は私自身、学生インターンだった頃に「ちゃんとやらなきゃ」と苦しくなった時期がありました。そんなとき、当時の拠点スタッフだった方が「おめぐはどうしてみたい？言われてやるんじゃなくて、おめぐが思うことをやってみたらいいんだよ」と声をかけてくれました。その一言が、自分と向き合うきっかけになったんです。そこから少しずつ意志を持って現場に立てるようになり、自分らしい行動ができるようになりました。
居場所づくりは人と人が関わる場所なので、日々さまざまなことが起こります。「正解がない問い」と向き合うことも多い。その中で、LFAに関わってくれている学生たちは、それぞれ目の前の子どもたちや社会への想いを持って参加しています。だからこそ、私は拠点長として、LFAがみんなが“やりたいこと”にちゃんと向き合える場所でありたいと思っています。ただ、それが子どもたちの思いを無視したり、置いてきぼりにするものであってはいけない。そこを見極めながら日々みんなと対話し、背中を押すのが職員の仕事なのかな。

新西（そた） LFAに関わる人はみんな、子どもに安心と笑顔を届けたいという気持ちを共通の思いとして持っていますよね。その上で、おめぐが学生を信じて任せてくれる姿勢が伝わってくるので、「自分らしくやっていいんだ」と思えるんです。一緒に働く中で、取り繕わずに、素直な自分のままで人と関わる大切さを学びました。将来、自分が誰かの上に立つ立場になったとき、おめぐのように、人の可能性を信じて伴走できる大人でありたい――そんな『理想の大人像』に出会えたことを、LFAに心から感謝しています。

馬谷（おめぐ） まさか褒められると思ってなかったので、ちょっと照れますね（笑）。

── 活動を振り返ってみて、「これだけは忘れられない」と感じたエピソードはありますか？

新西（そた） 特に印象に残っているのは、中学3年生の受験生への学習支援です。最初は「勉強が嫌い」と言っていましたが、話を聞くうちに、「頑張っても成果が出ない自分」に自信をなくしていたことがわかりました。だからこそ、色々な方法を試しながら、たとえ1日5分でも「継続的に勉強に向き合えた」と本人が胸を張って言える成功体験を積んでもらうことを意識して、1年間、粘り強く伴走しました。受験を終えたあと、これまでの受験勉強を振り返ったり、高校生活へのわくわくを話す中で、「勉強、好きかもしれない」と言ってくれたそのひと言が、本当に嬉しかったです。

馬谷（おめぐ） そたは、本当によく周りを見てるし、相手の気持ちに寄り添って支援し続ける姿勢が素敵だよね。相手をちゃんと見ていないと、かける言葉や行動も変わってくるもんね。

新西（そた） 実はインターンの途中で戸田での学習支援の活動が終了し、居場所拠点の運営に統合されることになったのですが、担当していた子どもたちの受験を最後まで見届けたくて、所属を居場所拠点に移して活動を続けていました。振り返ると、子どもを支援するつもりで関わり始めたのに、いつの間にか子どもたちの方から笑顔や前向きな気持ちをもらっていて、「子どもたちの存在が僕にこの活動を続けさせてくれている」と感じています。
『子どもの貧困』という言葉だけでは、その子自身の魅力や可能性まではあまり見えてこない気がします。支援の対象として一方的に見るのではなく、子どもたちとの関わりはもっと双方向なもので、むしろ彼らから学ぶことの方が多い。この実感や気づきを、もっと社会にも伝えていきたいと思っています。

馬谷（おめぐ） 本当にその通りだね。かなちん（高井）は社会人3年目だよね。仕事をしていて、LFAでの経験が繋がっていると感じる時はある？

高井（かなちん） 現在はスクールソーシャルワーカーとして、小中学生の支援に取り組んでいます。不登校の子どもたちを支援することも多いのですが、「学校に戻ること」が必ずしもゴールではありません。関係構築をしながら、一人ひとり異なる希望や進みたい道を丁寧に聞き取っていきます。また、先生やスクールカウンセラー、医療機関など、さまざまな関係者と連携しながら、その子にとっての安心できる過ごし方や関わり方を一緒に探っていく、“ハブ”のような役割を担っています。
この仕事に通じる感覚は、LFAでのインターン時代に育まれたものです。LFAでは基本、登録した子どもだけが利用する拠点が多いのですが、当時、立ち上げに関わった拠点は誰でも好きな時に立ち寄ることのできる非登録制の場所でした。ですので、来る子どもや人数もわからない中で、一人ひとりが心地よく過ごせる空間を整えることが求められました。誰かがいて、少し話せる相手がいるだけで、その子の世界がふっと広がる――そんな小さな変化を信じて、日々子どもたちと向き合っていました。
今の仕事や自身の団体で取り組んでいる居場所づくりでも、求められるのはまさに「環境をどう整えるか」という視点です。まだ経験は浅く、団体としても若手ではありますが、LFAで積み重ねた経験が、確かな土台として今の自分を支えてくれていると実感しています。

── 最後に、活動を応援してくださるサポーターの方々に向けて、メッセージをお願いします。

新西（そた） 子どもたちの笑顔を一番近くで見られるのは、サポーターの皆さまがLFAの活動を支えてくださっているおかげです。子どもたちが将来ふと振り返ったとき、「あのときの経験があったから」と思えるような、かけがえのない時間になっていると信じています。そして、その経験は次の世代へと確実に引き継がれていきます。そんなあたたかい連鎖を一緒に生み出してくださって、本当に心強く思っています。

高井（かなちん） 私は昨年、"中高生年代の居場所"をつくる任意団体を立ち上げました。サポーターの皆さまが支えてくださったおかげで、LFAで過ごす中で「自分も動き出したい」と思える経験を積むことができました。行動する力を育んでいただき、本当にありがとうございます。これからはLFAで受け取ったバトンを、今度は私が地域の中でつないでいきます。

馬谷（おめぐ） 子どもの居場所を育てていくには、何気ない日常を丁寧に紡いでいくことが必要不可欠です。その中で、子どもたちはもちろん保護者の方や地域のみなさまにも知っていただき、少しずつ地域の「頼り合える仲間」として迎え入れていただいている感覚があります。
そんな日々を今、複数のエリアで積み重ねることができているのは、歴代のLFAを支えてくださったサポーター一人ひとりの皆さまのおかげです。
先日、戸田拠点で同窓会を開いた際、ある参加者の方から「ここは、『幸せの形』を見つけられる場所ですね」と言っていただきました。その言葉が胸に深く響いています。これからも、同じ想いを持つ仲間と共に、子どもたちの未来を支え合いながら、あたたかい場所を育んでいきたいと思います。

SUPPORTERS

2024年度は、4,500名を超える個人サポーターさまと、100社近い企業／団体さまにさまざまな形でご支援いただき、活動することができました。

個人サポーターの皆さま

LFAの活動は、個人サポーターの皆さまからのあたたかいご寄付によって支えられています。
ここでは、活動を応援してくださるサポーターの方々からいただいたメッセージの一部をご紹介します。

40代男性
より広く、多くの地域にこの活動が広がることを期待しています。

年代不明女性
間接的な支援にはなりますが、日本の子ども達に明るい未来があればいいなと思っています。応援しています。

70代男性
私の寄付はわずかですが、それでも、そのお金がどう活用されているかは気になるものです。その意味で年次報告書を見、定期的なメールでの連絡を見ると、しっかりした組織だなと感心します。

60代女性
子どもの貧困を解決するというミッションに向かって、真摯に課題に取り組むスタッフの方々の姿に感銘を受けました。これからも支援を続けていきたいと思います。

30代女性
子どもの貧困に対して何か行動したいと思いながらも行動できずにいました。代表のお話を伺い、今後もできることがあればしていきたいと思いました。

40代女性
自分も子どもの頃、母子家庭でしたので、皆さまの取り組みは本当に素晴らしいなと共感して少しですが寄付させていただきました。この素晴らしい取り組み、これからも心から応援しています。

50代男性
貴団体については、皆が実行できる仕組みを自治体や他の子ども支援団体とともに作り上げて世の中に広げていこう、LFAはそのステークホルダーの一つに過ぎないという謙虚さを感じます。他のNPOや政府自治体で汗を流している皆さんを仲間と捉えてリスペクトする姿勢が感じられ、非常に共感できました。

「寄付がもたらす価値とは？」個人サポーターさまとの鼎談を実施

LFA設立10周年を記念し、LFAを継続的に支援してくださっている個人サポーターのお二人とコミュニティ推進事業部長・石神との鼎談を実施しました。

鼎談記事はこちらから

企業／団体サポーターの皆さま

下記をはじめとする企業さま・団体さまより、寄付・助成金をいただいて活動いたしました。
また、企業サポーターさまからは、金銭的な寄付のみならず、イベントや体験の機会の提供、物資のご寄付等、さまざまな形でご支援いただきました。

Goldman Sachs Gives	MUFG 三菱UFJフィナンシャル・グループ	SUNTORY	WELLINGTON MANAGEMENT®	STATE STREET
CARLYLE	Allan & Gill Gray PHILANTHROPIES	ORACLE	WiLL Seed	AllianceBernstein
Project KIBO	株式会社 日立アカデミー	Tomorrow, Together KDDI	scroll	co-op コープデリ
日本触媒	CAS CAPITAL	ECナビ	ALL DIFFERENT CO., LTD.	kao ハートポケット倶楽部
_KNOWLEDGE WORK	BOAST INVESTMENT	Public Resource PRF 公益財団法人 パブリックリソース財団		

株式会社イデアル
株式会社invox
ヴァスト・キュルチュール株式会社（FUKUWAKE）
ウイングアークIst株式会社
株式会社HRインスティテュート
株式会社エイトラス
株式会社エコ・マイニング
株式会社エス・シー・アライアンス
関西学院大学 ヒューマン・サービス支援室
株式会社極東商会
gooddo株式会社
ケンブリッジ・テクノロジー・パートナーズ株式会社
株式会社ジーン
セントラル短資FX株式会社
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント
東洋一通商株式会社
doTERRA CPTG Essential Oils Japan 合同会社
公益社団法人日本フィランソロピー協会
PAX株式会社
濱時間
株式会社ファンケルもっと何かできるはず基金
富国生命保険相互会社
プルデンシャルジブラルタファイナンシャル生命保険
株式会社プロダクトフォース
三井住友DSアセットマネジメント株式会社
三菱地所株式会社
一般財団法人未来サポート
山田コンサルティンググループ株式会社
株式会社 ラコステ ジャパン
WAN HAI LINES LTD

収支報告

収入

2024年度の経常収益の合計は6.3億円となり、前年度比84%と減少しました。

内訳としては、寄付金が3.1億円（48.4%）、助成金が2.3億円（37.0%）、事業収益が9.2千万円（14.6%）でした。

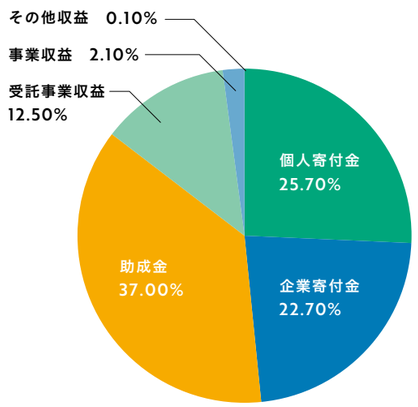
寄付収入（個人寄付金+企業寄付金）は前年比128%と大きく伸長し、とりわけ企業寄付が前年比139%と顕著な増加を示しました。多くの皆さまからの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。

一方で、助成金収入は前年比55%と大きく減少しましたが、これは2023年度に実施していた休眠預金の資金分配団体としての活動終了の影響が大きく（昨年度：2.7億円）、収入減に伴って、支出も減少しております。

毎年助成金の継続有無が変動するなかで、子どもたちの多様な状況に寄り添いながら、継続的かつ柔軟に支援を届けていくために、皆さまからのご寄付がこれまで以上に大切な役割を果たします。

引き続き、継続的なご寄付・ご支援を通じて、子どもたちの未来を共に支えていただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

	科目		全額（単位：円）
収入	個人寄付金	（個人サポーター寄付金）	162,500,657
	企業寄付金	（企業サポーター寄付金）	143,385,839
	助成金	（助成団体・企業からの助成金）	234,017,042
	受託事業収益	（委託金収入）	78,839,006
	事業収益	（啓発事業収入）	13,425,648
	その他収益	（雑収入等）	544,927
	総計		**632,713,119**



支出

LFAは、3つのアプローチに基づいて事業を行っています。①「一人に寄り添う」活動として、子どもへの直接支援（学習支援、居場所づくり、食事支援など）、②「仕組みを広げる」活動として、ノウハウ展開やナレッジサイトの運営 、③「社会を動かす」活動として、メディアを通じた課題の普及啓発活動や人材育成、政策提言活動などです。

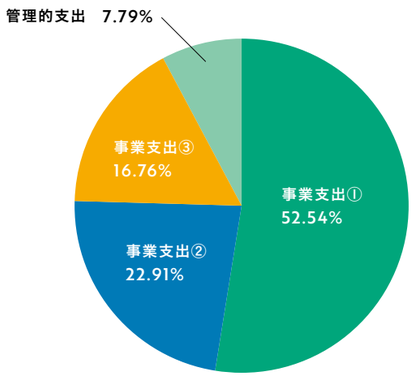
2024年度の経常支出は、6.3億円で、前年度比83%（約1億2,500万円減）と減少しました。特に②「仕組みを広げる活動」（ナレッジ展開）は、前年から約1.4億円の大幅減となり、支出も1.4億円にとどまりました。これは、2023年度に実施していた休眠預金を活用した助成事業の終了によるものであり、全体の支出構成にも影響を与えています。

一方で、①「一人に寄り添う活動」（現場支援）は前年比135%（+8,500万円）と大きく増加し、3.3億円の支出となりました。支出全体に占める割合も52.5%と、構成比の中で最大となっています。

③「社会を動かす活動」（普及啓発）は前年比▲13%（▲1,560万円）とやや減少したものの、継続的な発信・政策提言活動を実施しました。

また、認定NPOとしての法令遵守や資金管理体制の強化に伴い、管理費は約5,400万円（前年比▲52%）と減少しました。前年に比べて管理体制の効率化が進んだ一方、構成比としては7.8%と安定的な水準を保っています。

	科目		全額（単位：円）
支出	事業支出	①一人に寄り添う（現場支援）	330,917,671
	事業支出	②仕組みを広げる（ナレッジ展開）	144,294,472
	事業支出	③社会を動かす（普及啓発）	105,595,579
	管理的支出		49,057,893
	総計		**629,865,615**



団体概要

設立　2014年7月23日

所在地　東京都新宿区新宿5丁目1-1
ローヤルマンションビル404

従業員数　職員63名、業務委託45名、インターン70名
※ 2025年3月末時点

事業内容　私たちは、「子どもの貧困」を本質的に解決するために、下記の3つの事業に取り組んでいます。

1〈一人に寄り添う〉
困難を抱える6～18歳の子どもが自立するまでを、早期から切れ目なくサポートする、居場所づくり・学習支援・食事支援・保護者支援・訪問支援などを通した「地域協働型子ども包括支援」の実践。

2〈仕組みを広げる〉
「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を目指した、ノウハウ提供・共有プラットフォームの運営。

3〈社会を動かす〉
現場での支援活動や全国の子ども支援団体とのネットワークづくりを通じた、普及啓発・人材育成・アドボカシー活動。

役員紹介

代表理事 ｜ 李炯植
1990年、兵庫県生まれ。東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了。2014年に特定非営利活動法人Learning for Allを設立、同法人代表理事に就任。これまでに困難を抱えた子どもへの無償の学習支援や居場所支援を行っている。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会副代表理事。2018年「Forbes JAPAN 30 under 30」に選出。2022年「内閣官房のこどもの居場所づくりに関する検討委員会」の検討委員に選出。

理事 ｜ 熊平美香
昭和女子大学キャリアカレッジ学院長 ハーバード経営大学院経営学修士課程修了

理事 ｜ 大越一樹
株式会社ボードアドバイザーズ　パートナー

監事 ｜ 渡辺伸行
TMI総合法律事務所 パートナー 早稲田大学法学部卒業 ニューヨーク大学ロースクール卒業

沿革

2010
・学習支援事業を開始
（現・認定NPO法人Teach For Japan内の一事業として）

2011
・東京都北区の学習支援が「北区改革プランベスト1」を受賞

2014
・NPO法人Learning for Allを設立

2016
・居場所づくり事業を開始
（日本財団「子どもの貧困対策プロジェクト」第一号拠点）
・食事支援、保護者支援、普及啓発活動も展開。
・代表 李が「全国子どもの貧困・教育支援団体議会」理事に選出

2018
・「地域協働型子ども包括支援」モデル構築に着手
・「エクセレントNPO大賞」および「課題解決力賞」を受賞
・代表 李がForbes「30 UNDER 30 JAPAN 2018」に選出
・他団体へLFAの知見を共有するノウハウ展開事業を開始

2019
・ 中高生向けの居場所づくり事業を開始

2020
・コロナ禍における支援家庭を対象とした
ニーズ把握調査を実施・発表

2021
・子ども支援ノウハウを提供する『こども支援ナビ』を運用開始
・「地域協働型子ども包括支援基金」を設立
・東京大学大学院教育学研究科と連携協定を締結

2022
・認定NPO法人を取得
・代表 李が内閣官房・こども家庭庁など
複数の政府・自治体委員会に参画

2023
・READYFOR株式会社と連携し、休眠預金を活用して
全国11団体に2.5億円を助成
・子ども支援事業部　宇地原がこども家庭庁部会の
臨時委員に就任

2024
・Learning for All設立10周年を記念し、特設サイトを公開
・子ども支援事業部　宇地原がこども家庭庁
こども家庭審議会 こどもの居場所 部会委員に就任
・尼崎市に、こども・若者が自由に利用できるユースセンター
「Hygge（ヒュッゲ）」を開所
・世田谷に、不登校の子どもたちが利用できる居場所
「Ho-Ho」を開所
・一般社団法人　社会的養育地域支援ネットワーク創設を
支援。代表・李が代表理事に就任
・代表・李が新公益連盟の共同代表に就任
・個人版ふるさと納税による寄付受付や遺贈寄付窓口を開始
・株式会社yutori、株式会社インターブランドジャパンとの
協働を通じ、10周年記念コラボグッズの販売を開始。

税制上の優遇措置について

認定ＮＰＯ法人への寄附金は、申告によって、所得税や個人住民税について、税制上の優遇措置を受けることができます。

個人の方からのご寄付

寄附金控除の対象となります。くわしくはお近くの税務署や国税庁のウェブサイト等でご確認ください。

例：3,000円を毎月ご寄附いただいた場合	
所得税	（36,000円－2,000円）× 40% ＝ 13,600円が控除されます。
住民税	・東京都以外在住の場合 → 住民税の控除はありません ・都内（新宿区以外）在住の場合 → 都民税4%のみ控除となります （36,000円-2,000円）×4%＝1,360円 ・東京都新宿区在住の場合 → 都民税4%＋区民税6%が控除されます （36,000円-2,000円）×10%＝3,400円
上記の所得税控除と住民税控除の合算金額が、寄附金税額控除の対象となります。	

- 控除を受けるには、お届けする「寄附金受領証明書」（領収書）を使用しての確定申告が必要です。「税額控除」もしくは「所得控除」のいずれか有利な方をご選択いただけます。多くの場合「税額控除」を選択されますと、寄附金の最大約5割が控除されます。
- 控除額には一定の上限額があります。
  計算式：（その年中に支出した寄附金額の合計額 － 2,000円）
  ×（所得税控除 40%＋ 住民税控除 0〜10%）＝「寄附金税額控除額」
  寄附金特別控除に関するくわしいことは、お近くの税務署にお尋ねください。

法人からのご寄付

寄附・申告により、損金算入限度枠が拡大される優遇措置があります。くわしくはお近くの税務署や国税庁のウェブサイト等でご確認ください。

- 法人が認定ＮＰＯ法人等に対し、その認定ＮＰＯ法人等の行う特定非営利活動に係る事業に関連する寄附をした場合は、一般寄附金の損金算入限度額とは別に、特定公益増進法人に対する寄附金の額と合わせて、特別損金算入限度額の範囲内で損金算入が認められます。
- なお、寄附金の額の合計額が特別損金算入限度額を超える場合には、その超える部分の金額は一般寄附金の額と合わせて、一般寄附金の損金算入限度額の範囲内で損金算入が認められます。
（内閣府ＮＰＯホームページより）

認定ＮＰＯ法人に対する寄附金に係る特別損金算入限度額
① 資本がある法人の損金算入限度額 （期末資本金の額×0.375%＋所得金額※×6.25%）×1/2
② 資本がない法人の損金算入限度額 所得金額※×6.25% ※所得金額＝所得金額（当期純利益に税務調整をした額） ＋寄附金の支出額

モデルケース：資本金1,000万円　所得金額1,000万円の場合

① 特別損金算入限度額　33.1万円
② 一般損金算入限度額　6.9万円
上記、①②合算金額の40万円まで損金に算入可能です。

寄付で応援する

1. ＷＥＢサイトから寄付をする

右記ＷＥＢサイトから寄付を受け付けています。
「LFA 寄付」でも検索可能です。

https://learningforall.or.jp/support/

LFA　寄付　検索

2. 銀行振り込みで寄付をする

右記の口座にてお預かりしています。
※右記の口座からお振込いただいた場合、
銀行からLFAへ個人情報が連携されることはございません。
お問い合わせフォームから「銀行口座振込でのご寄付」をお選びいただき、
寄附金受領証明書の要・不要、ご住所等ご連絡いただくか、お電話にてご連絡ください

［銀行名］三菱UFJ銀行
［支店名］新宿支店
［種類］普通
［口座番号］0578870
［カナ］トクヒ）ラーニングフォーオール

お問い合わせフォーム

認定ＮＰＯ法人Learning for All

〒160-0022 東京都新宿区新宿五丁目1番1号ローヤルマンションビル404号室
TEL　03-5357-7131（受付時間：平日10時〜17時）